

小学二年生 生活綴り方的道徳の試み



「おにぎりやらない？ やりたい人。」
「おにぎりやらない？ やりたい人。」
「おにぎりやらない？ やりたい人。」

平川 美和（北海道 中空知作文の会）

どの子も楽しく暮らせる学級でありたい、と学級経営するものの、様々な問題はあるのが常です。様々な考えの人間がいて、人により、感じ方が違うのですから、当然です。しかし、そんな子どもが抱える悩みを、担任や仲間と語れる関係を作ること、また、それを受け止める学級を作りたいものです。ある日、A子が、家庭学習ノートに、次のような日記を書いてきました。

『ケンカしてない』

A子
まつくら公園で、B子とCとDの四人で、あそびました。と中で、三年生の友だちが三人来ました。たかたかおにのち中で、B子さんたちが、たんまをしました。その時に、三

年生が

「おにぎりやらない？ やりたい人。」
と、言いました。わたしは、それに手をあげました。おにぎりこがはまりました。その時、B子さんたちが、たんまをおわり、こつと言いました。

「おにぎりこはやだ。たかたかおにやろう。」
と、Bが言いました。ケンカになって、B子が「もついい。A子は、おにぎりこをやいな。つからは、たかたかおにするから。いっつへけど、A子は、さいていだね。」
と、言われました。わたしは、かなしくなつて、なきぞつになりました。

そして、4時になったので帰り、家に帰つて、たかたかおにをしました。わたしは、心の中で（学校、行きたくないな。）

くれたことに感謝の気持ちが強まりました。また、解決をしているから、今日、元気に学校に来れたのだなど、少し安心して、赤ペンを入れました。

一方、けんか相手のB子さんは、普段、学級の中では学力優秀、生活態度もピカイチのお姉さんタイプです。入学当初は大人しくてなかなか自分を出せずに控えめにしていました。が、二年生になり、負けず嫌いの素の自分を少しずつ出せるようになってきたところ。お家の方から、二歳年上の姉とは口汚い兄弟喧嘩をよくする、とは聞いていましたが、その姿は学校ではまだ出せていませんでした。いよいよそんな姿を友だちの前でも出したんだな、と私は想像できました。

これは、学級のみならず学習させてもらえるチャンスかもしれない、と考え、準備をすることにしました。

まずは、CとDを呼び、状況が事実か確かめると、詳しい状況は少し違いましたが、だいたい合っていました。とにかく大人しくしてっかり者のA子とB子が、けんかをするなんて初めてのことでびっくりした、と二人は言いました。

次に、B子を呼んで話しをしました。A子

の書いた日記をもとに、そんなことがあったか、尋ねたところ、ほろほろと涙を流します。言い過ぎた自分を後悔している様子でした。B子にも、そのけんかのことを書いてもらいました。

『けんかした』

B子
まつくら公園で、A子とCとうちの三人で、あそびました。たかたかおにをしています。B子は、おにだった。

と中で、三年生の友だちがきて、すぐ「おにこつこをやろう。」
と言っていました。

Cとつちが休けいして、水のみに行った。その時、Dがきた。A子が、三年生のおにこつこに手をあげていた。
(A子がやめたら、おにもいなくなるし、人がへつて、つまらなくなる。)
と思つた。Cとつちで

「たかたかおにを、やめないで。A子。」
と言つたけど、きいてくれなかった。それで、「じゃあ、Aだけ、おにこつこしていいよ。」と、かなりおにこつこしていいよ。」

A子は、けつきよく、そのままおにこつこをしていて、そのまま帰りました。

と、思いました。夕方、電話がきて、そのあい手は、B子さんでした。わたしは、心の中で「たかん、わたしのことをまた「さいてい」とか「ほいくしよ行けば」とか言われるんだろつな」と、思いました。そして、そうぞつがちがつて、おたがいにあやまりました。

普段、笑顔で物静かで、誰にでも優しくできるA子さんです。きっと、三年生の友だちに誘われた時に、優しさを応えたのでしょうが、結果として、元々遊んでいたB子たちの怒りを引き出すことになるとは想定できず、悲しい展開になったのだと想像がつかしました。ただ、心に傷がついたのは確かでしょう。「学校に行きたくない」と正直に書き綴つて

家にかえり、お母さんに

「A子さんに電話してみたら。」

と、言われて、けんかしたままで、気になっていたので、電話を試してみることになりました。

「A子、けんかしてごめんね。」
と、言つと、A子は

「わたしも、ごめんね。」
と、言いました。それで、なかなかおしりして、すつきりしました。

B子は、公園から帰り、すぐに自分のしたことを後悔していたから、お母さんにお話したのだらうと予想がつかしました。

A子とB子のような気持ちのすれ違いは、子どもたちの生活の中では、よくあることです。失敗を乗り越えた良い例として学ばせる価値があると判断し、二人の日記をメインとした道徳の授業を計画しました。A子とB子、さらにお家の方にも確認を取ってから授業で日記を使わせてもらうことにしました。

▼『本当に良い行動とは何だろうか？』という題材名、道徳項目「善悪判断」の授業です。導入は『わたしたちの道徳 1・2年（文部科学省）』『よいと思うことは すすんでのページを使いました。この副教材に載っている善悪判断は、当然すぎ、子どもたち

は、学習しなくても知っていただろう事実ばかりでした。例えば、人の家の壁に落書きをしてはいけない、とか、公園にゴミをポイ捨てしてはいけない、とか授業中おしゃべりをしてはいけない、とかお年寄りには席を譲りましょう、といったものでした。学級二十一名全員が元氣よく挙手をして答えられる問いで、この副教材だけで学習を終えてはいけな

いと感じました。

そして、ここでA子さんの日記を名前を伏せて提示します。友だちの日記を読み合う学習を一年生の時から継続している学級です。(詳しくは『作文と教育2015年度4月号』に掲載)いつものように、この学級の誰かが書いたものだと想像しながら、グーツとのめり込んで読む子どもたちの姿がありました。「えっと、これは誰だろう? まつくら公園でしよう……。」などと呟きながら読んでいます。国語の物語文を学習してきたように、A子さんの気持ちに分かる場所に線を引き、気持ちを書き込みながら読みます。どの子も、A子さんの悲しい気持ちが書けているところに線が引かれています。特に「家に帰って、たくさんなきました」と「学校、行きたくないな」のところには、ほぼ全員が線を引きました。A子が誰か分からないままでは、想像が半分になってしまうので、ここで本人に手を挙げてもらい、明かしました。「まさか、A子さんがけんかなんてする?」という驚きの声が多く上がりました。担任がA子さんの普段の優しさを思い出させ、A子さんならではの、優しさからの行動だと想像させると、学級中が納得してくれました。「A子さん、いつも優しいからね。」と反応してくれ

た。他教科では、学習に支援が必要な子も、自力でぐんぐん書きました。心が動いた証拠です。

「A子とB子がけんかするなんて、びっくりしたよ。A子でも、こんなことあるんだね。」

「A子、かなしかつたね。ほくもあるよ。」

「B子さん、そうやって、おこつちゃう時は、だれでもあるよ。でもよくお母さんに言って、電話できたね。」

「Aさんのこと、しんぱいで、B子さんは、電話したんだね。」

「B子さん、よくこんなこと書けたね。ほんせいしていたんだね。」

「B子ちゃん、とっても反省してるね。だから、電話したんだね。わたしも、こんなことあるよ。なかなかおりでできてよかったね。」

「A子、つらかったね。」

る子もいました。どの子も、文に根拠をおいて、A子さんの悲しんでいる気持ちを共感しようとしてくれていました。

次に、B子さんの日記を提示します。同様にB子さんの気持ちに分かる場所に線を引いて読みます。仲良く遊びたいのにうまく遊べない展開に苛立っているところや、言い過ぎて後悔しているところに線を引いています。特に、「けんかしたままで、気になつていたので、電話をしてみました。」に線を引く子が多かいました。B子も誰か明かすと、先ほどよりも驚きが大きい様子でした。「B子がこんなこと言うかな。」という反応です。B子が分かってから、なおのこと、どちらかというところ、B子の苛立ちよりも、後悔している気持ちに共感しようとしてくれていました。普段のB子を知っているからなのでしょう。

次にポスター「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました」(2013年度新聞広告クリエティブコンテスト最優秀賞作品)を見せました。正義の味方の代名詞のような存在である桃太郎ですが、立場や見方が変わると、悪い人になる、と解釈できます。子どもたちに次のように投げかけました。「自分は正しいと思ってやったことなのに、相手にとっては、良くないことになっていった、ということはないかな。」子どもたちは、先ほどの「良いと思うことはすすんでやろう」といった分かりやすい話しと変わり、深く考える顔つきに変わりました。

「そつういことほくある……。」と返事をしてくれる子もいました。「本当に良い行動とは、何だろう」と考え始めている様子でした。

ここで、それぞれの立場から正しい行動だったことを確認します。A子の立場からすると、三年生への優しさから誘いにのつた行動だったこと。B子の立場からすると、先に遊んでいたのに鬼が抜けて困るということ

を伝えるだけだったこと。二人とも自分が正しいと思つてやったことだと想像させます。

二人とも正しいと思つたことをやったのにけんかになっている。A子さんとB子さんは、どうすれば、けんかにならなかつただろうか、と問います。すると、「A子さんは、三年生に気を遣つたのは分かるけど、最初から遊んでいた人に迷惑がかかるから、誘いのつちやいけない。」A子さんは、自分も他の子とたかたかおんをしていたことを伝えた方がよい。「三年生にも一緒にたかたかおんをしようと誘えば良い。」などと意見が出ました。一方、B子さんについても「もっと優しく言つてあげれば良かった。」「怒つて言うのは気持ち分かるけど、言い過ぎだと思つ。」などと意見が出ました。

最後に、『本当に良い行動とは何だろう?』という題材名でもある問いに戻りました。「難しいね。」「その都度違うね。」「自分にとって正しくても、相手にとっては正しくないこともあるから、人の気持ちも考えられると良いね。」とし、この授業で答えを出さず、生活の中で考え続けて欲しいという願いを持ち、敢えて、ぼんやりとした答えで終了しました。

この後、二人にお手紙を書いてもらいま

し、全員がそれぞれA子とB子にあてて書いた手紙を読み上げ、学級にしばらく掲示しました。

実は、完璧主義のB子は、この日記を人前で公開することを渋っていました。失敗を人前で発表すること自体が恥ずかしくなつたようです。しかし、この経験を通し、変容しました。何でもできるが、失敗を恐れ、控えめだつ

たB子さんが、例えば、体育のマット運動の例示に、学級でただ一人、進んで挙手してくれたり、給食中おしゃべりになり、「友だちが増えた」と自分の成長を語るようになりました。

穏やかだが、控えめだったA子さんが、例えば、班の子を笑わせて楽しんでいた、班長選挙に立候補したり、班長会議で「誰でも友だちだから」と発言するようになりました。その後のA子とB子の活躍はめざましく、自信に満ちていました。読み合いで成長した一つの例です。

この学習を通し、他の子どもたちは、自分の疑似体験を思い起こし、自分の問題として学習しました。さらに、「失敗を怖れないこと」「正直に語つて良いこと」「責めすぎない寛容さ」を学びました。保護者の方は「今回の件では娘のことで学習させていただきありがたいがとうございました」と理解してくれました。

学級が一つになり、心がつながる読み合いの実践は、今を生きる子どもに寄り添い、人間の成長を励ます教育そのものだと思います。